

信念の固め方 The Fixation of Belief

1877

Charles Sanders Peirce(1839-1914)

認知科学研究室研究会資料

井原二郎

1994 年 11 月 29 日

紹介文献

- Moris R. Choen(edited), "Chance, Love, and Logic", NY, George Braziller, Inc., 1956.(朝輪幸雄訳:「偶然・愛・論理」, 三一書房, 第1部第1章, 1982).
- Charles Hartson and Paul Weiss(edited), "Collected Papers of Charles Sanders Peirce," The Belknap Press of Harvard University Press, Vol.5, pp.223-247, Cambridge, Fourth printing 1978.

1 科学と論理 (SCIENCE AND LOGIC)

スコラ哲学者によれば, あらゆる知識は権威か理性かのいずれかにもとづいていて, しかも理性によって演繹的に導きだされるいっさいのものは, 究極において, 権威に裏づけられた前提を拠り所になっている, というのが論理学の根本原理であった.

ケプラーの場合と同様, 数世代にわたって鮮明に記憶されるほどの偉大な科学的著作は, そのどれもが, 執筆された当時の推理技術の不備な状態を示す実例を提供している. つまり, 科学の主要な発展段階は, その一つ一つが論理学の一課程 (a lesson) をなしていたのである.

ラヴォアジエが化学の研究に着手したときも, 事情は同じであった. 「読め, 読め, 読め, 働け, 祈れ, そして, ふたたび読め」というのが昔の化学者たちの格言であった. しかし, ラヴォアジエの方法は, そうではなく, ある長い複雑な過程がある特定の結果を生じるであろうと想像し, この想像をじっくりと忍耐よく実行にうつし, その避けがたい失敗を味わったあとで, ある修正を加えれば他の結果が生じるかもしれないと想像し, 結局は最後の想像を事実として発表するにいたる, というものであった.

その方法は彼の精神を実験室におもむかせ, 蒸留器や蒸留ビンを思考の道具にすることとなった. こうして, 推論とは言葉や幻想を操るのではなく, 実在的事物を扱いながら両眼を見開いて行すべきものである, という新しい考えがもたらされた.

ダーウィンの学説をめぐる論争は, その大部分が論理学の問題である.

2 指導原理 (GUIDING PRINCIPLES)

推理の目的は, われわれにとって既知の事実を考察することから, なにか別の未知の事実を発見する点にある. したがって, 推理が真の前提から真の結論をもたらすものであれば, それは良き推理であり, そうでなければ悪い推理である. かくして, 妥当性の問題は純粋に事実の問題であって, 思考に関する問題ではない ([T]he question of validity is purely one of fact and not of thinking.) . 前提で述べられた諸事実を A として, 結論でいわれた事実を B とすれば, 問題は, A であれば概して B であるようにこれらの事実が実際に関係し合っているかどうかということになる (A being the facts stated in the promisses and B being that concluded, the question is, whether these facts are **really** so related that if A were B would **generally** be.) . もしも, A ならば概して B であるとすれば, その推論は妥当であり, そうでなければ, 妥当ではない. 精神が前提を承認するとき, われわれは結論も承認したいという衝動を感じるかどうかはこの際まったく問題にならない. 一般に, われわれが, 生来正しく推理することは確かである. しかし, それは偶然的事柄にすぎない. 真なる結論は, われわれがそれを承認したいという衝動を覚えなくとも, 依然として真であろうし, 偽なる結論は, われわれがそれを信じたいという傾向に抗いがたくとも, なお偽であろう.

ひとたび不慣れな分野, もしくは, 行為の結果が経験によってたえず吟味されるわけにはいかない分野に足を踏み入れるとき, いかに強力な知性の持ち主でも, しばしば方角を見失い, 目標から全然はずれた方向に無駄な努力を傾けるか, あるいは, まったく途方にくれてしまうであろう. こうしたばあいに立ちいたれば, 推理の指導原理についての一般的研究が有益であることがきっと分かってもらえるであろう.

個々の推論を支配する特定の精神の習慣はある一つの命題の形に定式化できよう。そうした命題は、その習慣によって規定される推論が妥当なときは真であり、その推論が妥当でないときは偽となる。このような定式は推論の指導原理と呼ばれる。

例：回転している円形の銅版を磁石の両極のあいだに置くと急に回転が止まるという現象を目撃し、そこから、あらゆる銅版においても同じ現象が起こる、と推論したと仮定してみよう。この推論における指導原理は、「ひとつの銅版について真なることは他の銅版についても真である」というものである。

- 事実のあいだには一つの区分が存在している。

(1) 指導原理として必要不可欠のもの

一定の結論が一定の前提から導出されるかどうかを問題にすると必ず前提として想定されている事実

(2) 研究対象として別個の意義をもつもの

そうした問のうちに含まれていない事実

- そうした論理学的問をはじめて発するとき仮定されている事実の例

(1) 疑念と信念といった二つの精神状態が存在すること

(2) 思考の対象が同一のままでも、精神状態が疑念から信念へ推移しうること

(3) この精神状態の推移はすべての精神を等しく拘束するある規則に従うこと

これらの事実は、推理についてなにか明確な観念がもてるようになるまえに、あらかじめ知っているにちがいない事実であるから、それが真であるか偽であるかをあらためて検討することは、さして重要であるとは思えない。これにたいして、他方、精神状態の推移過程という観念そのものから導きだされる推理の諸規則がもっとも本質的なものである。

3 疑念と信念 (DOUBT AND BELIEF)

- 疑念と信念の区別

(1) 感じの相違

疑っているという感じと、信じているという感じは異なっている。

(2) 行動の実現

信念は願望に指針を与え、行動を実現させる。疑念はこうした効果をけっして生み出さない。

(3) 不安な状態と満ちたりた状態

疑念は満たされない不安な状態であり、われわれはなんとかしてそこから逃れ出て、信念の状態にたどりつこうと苦闘する。これに反して、信念は満ちたりた落ち着いた状態であり、われわれはそれを避けたり、他の信念に乗りかえたりする気にはならない。それどころか、われわれはただ単に信じるというのではなく、まさに信じているものをかたくなに信じるようになりがちである。

4 探究の目的 (THE END OF INQUIRY)

疑念という刺激は信念に到達しようとする探究の苦闘を生ずる唯一の直接的な動機である。

探究の唯一の目標は意見の確定にある ([T]he sole object of inquiry is the settlement of opinion.)。

(1) 疑問形と「真実の生きた疑念」

ある命題を疑問形に書きなおすだけで、精神が信念追求の苦闘に駆り立てられるものではない。そのためには、真実の生きた疑念がなければならず、こうした疑念がなければ、どんな議論をしても無益である (There must be a real and living doubt, and without this all discussion is idle.)。

(2) 論証の前提の事実上の確実性

論証と呼ばれる完全に満足のいく結果を得るためには、探究は現実疑念をさしはさむ余地のまったくない命題から出発すればよい。これらの前提は、事実上少しも疑われなければ、それで十分なのである。

(3) 精神活動の終息

疑念がやむとき、その問題にかんする精神の活動は終息する。

5 信念を固める方法 (METHODS OF FIXING BELIEF)

5.1 固執の方法 (The method of tenacity)

意見の確定が探究の唯一の目的であり、しかも、信念は習慣の性質を帯びているとすると、つぎのような信念の固め方があり得る。

ある問題にたいして自分の気に入った解答を採りあげ、心のなかでそれをたえず反誦し、その信念の強化に資するものならばそのすべてを心に留め、そして、その信念の妨げになるものには侮蔑と憎悪をもって背を向けることによって、われわれはその望ましい目的を達成しようとする。

固有の利点

強力さと単純さと単刀直入性には感心する。この方法を遂行する人はその決断する性格という点できわだっていゝ。固執の方法という精神的規則に従えば、決断はきわめて容易になるからである。彼らは自ら欲することを決心するのに無駄な時間は使わず、選択肢のうち真つ先に現れたものに電光石光のごとくしがみつきの、なにが起ころうと一瞬たりとも逡巡せず、最後までそれを保持しつづける。これは、一般に、永続性に欠けるが、輝かしい成功を伴う立派な性質の一つである。われわれは、その結果がどうなるか承知してはいても、理性を放棄できる人間をうらやまないわけにはいかない。

個人における固定法から社会共同体における固定法へ

実践の場でその方法を採用する人は、他人が自分と違った考え方をするのに気づくであろうし、また、もっと分別が働くときには、他人の意見も自分のと同様にすぐれている、と思うようになりやすい。そして、それが契機となり、自分の信念にたいする彼の信頼がぐらつくであろう。他人の思想や感情 (sentiment) は自分のそれと同等の値打ちがあるかもしれぬという考えは、明らかに一步前進であり、しかも、きわめて重要な前進である。

この前進は人間の内部にひそむ強力な衝動から生まれるのであり、その衝動を抑えれば、人類は危機に陥るであろう。われわれは、世捨て人にならずにいるかぎり、どうしても、たがいに影響を及ぼし合わずにはいられない。だとすれば、たんなる個人においてではなく、社会共同体において信念をどうやって固めるかが問題となってくる。

5.2 権威の方法 (The method of authority)

個人の意志の代わりに、国家の意志に働く場を与えてやろう。

- 国民に正論を教え込む教育制度の創設
- 反正論を阻止する権力
- 無知の状態にするための情報管制
- 狂信的にしておく
- 既成の信念を拒否する者の脅迫、追放、私刑、異端審問と厳罰、全員虐殺
- 忠誠心に富む人を国外の影響から徹底的に隔離する

固有の利点

この方法は固執の方法に比べ知的ならびに道徳的な点ではるかにすぐれている。

- タイ、エジプト、ヨーロッパなどにみられるように、その方法にもとづいて組み立てられた石の建造物
- この方法によって組織された信条のいくつかはきわめて長期にわたって存在しており、それに匹敵する長期の時代区分は、地質学的年代を除けば、一つもない。

弱点

しかし、あらゆる問題について意見を統制、支配する役割を果しうる制度などありえない。制度が監視できるのはもっとも重要な問題にかぎられ、その他の問題については、人びとの精神を自然な働きにゆだねざるをえない。この不完全さは、ある人の意見が他の人の意見に影響を与えないような文化状態に人びとがおかれているかぎり、つまり、人びとが意見を交換して正しい結論を導きだせぬかぎり、その方法上の弱さの原因とはならないであろう。

とはいえ、僧侶支配が絶頂をきわめる国家においても、上に述べた状態を乗り越える人物が何人かは現れるであろう。そうした人物はもっと広い社会的感情 (social feeling) を保持している。彼らは、他の国や他の時代の人びとが、彼ら自身信じるようにしつけられてきた教義 (doctrines) と非常に異なる教義を支持していたことを知る。彼らを現に信じているように信じさせ、それとまったく異なったふうに信じさせないようにしたのは、彼らが現に受けてきたように教育を受け、彼らを現に取り巻いているような風習や制度によって取り巻かれているという、たんなる偶然にすぎないという点に、気づかぬわけにはいかない。また、彼らの公正な精神 (candour) は、自分らの見解を他の国民、他の国々の見解より高く評価すべき理由など一つもないと反省せずにはいられなくなる。

かくして、彼らの心中にさまざまな疑念が生じてくる。

さらに彼らは、彼ら自身の気まぐれ、もしくは、大衆の意見をつくりだした人びとの気まぐれによって定められたと思われるあらゆる信念にたいしても、上のような疑念を抱くべきと感じるにいたるであろう。だからして、ある信念にかたくなに固執したり、それを独善的に他人に押しつけたりするまねはやめて、意見確定の新たな方法を採用されねばならない。

5.3 ア・プリオリの方法 (The a priori method)

その方法は、信じようとする衝動を生み出すばかりでなく、いかなる主義主張が信じるに値するかをも決定する方法である。そこで、われわれのもって生まれた好みになんらの束縛を加えず、その好みのおもむくままに、人びとが対話し、さまざまな視点から問題を考察しながら、各人の信念を自然の理に合わせ徐々に発展させるように仕向ける。この方法は芸術における諸概念が成熟するのに寄与してきた方法に似通っている。この方法の完璧な実例は形而上学の歴史のうちに見つけ出せる。形而上学の体系は、通常、観察された事実に依存していない。少なくとも、その観察事実への依存度は大きくない。それらの体系が採用されたのは、主として、それらの体系の根本をなす命題が「理性に適う」 (agreeable to reason) ように思えたからである。「理性に適う」というのはまさにぴったりした表現である。それは経験と一致するものごとを意味せず、われわれが信じたい気持ちになるものごとを意味していえる。

固有の利点

気持のよい結論が得られる点で抜きん出ている。自分たちの気の向く信念ならなんでも採用するというのがこの方法の本性である。冷酷非情な事実によって楽しい夢が破られるまでは、本性上、だれでも、自分の虚栄心をくすぐる甘いことばを信じたがるものである。

帰納法へ

理性の見地からすると、この方法は、すでに言及された二つの方法に比べて、はるかに知的であり、はるかに尊重されるべきである。とはいっても、その方法が破産したという事実はいまや誰の目にも明白である。その方法は探究というものを趣味の啓蒙のごときものと考えている。しかし残念ながら、趣味というものは流行に左右されやすいものであるから、形而上学者たちはかつて確固たる意見の一致に到達したためしがなく、古来今日にいたるまで、唯物論と観念論とのあいだで振り子は左に右にとゆれ動いてきている。その結果、「ア・プリオリの方法」に背を向け、ベーコン卿のいう真の帰納法におもむかざるをえなくなる。

5.4 科学の方法 (The method of science)

さて、自分の信念が事実とは無関係な事情によって規定されているということを知れば、ある人びと – そのなかには、わたしの読者もきっと含まれていると思うが – はその瞬間から、その信念が疑わしいと、ことばのうでで認めるだけでなく、その信念を本当に疑うようになり、その結果、かれらの信念はもはや信念ではなくなるであろう。

したがって、われわれの疑念を晴らすためには、信念が人間的なものによってではなく、外部に存在する永遠なもの (some external permanency) – われわれの思考によって影響されないもの – によって確立されるような方法を見つけだす必要がある。

根本的仮定

世界にはもろもろの実在的事物が存在しており、その性格はわれわれのその事物についての意見からまったく独立している。それらの実在物は規則正しい法則に従ってわれわれの感官に作用を及ぼす。その結果生じる感覚は、われわれと対象との関係と同じように、いろいろ異なるが、われわれは、知覚の法則を利用することにより、事物の真実本当の姿がどうであるかを推理にもとづき突き止めることができる。そして、推理について十分に経験を積み、十分に理性を働かせるならば、だれでも唯一無二の真なる結論に到達するであろう。

「実在物の存在の仮定」の擁護

(1) 科学的方法と実在の概念の調和

実在的事物の存在することが探究によって証明されるとは考えられないとしても、少なくとも、探究によって反対の結論に到達することはなく、その方法とその方法の土台をなす実在の概念とはいつも調和している。それゆえ、その方法を実際に使用しても、他のすべての方法の場合のように、それによって必然的にその方法に対する疑念が生じたりはしないのである。

(2) 不満と実在概念

いずれの種類の方法にせよ、信念を固める方法を生み出す原因をなすのは、二つの相反する命題に対する不満の気持である。しかし、〔そうした不満を抱くとき〕そこにはすでに、ある一つの事物が存在し、その事物は一つの命題で表現されるはずであるということが、漠然と容認されているのである。それゆえ、実在物が存在するという事実を心底から疑うことはだれにもできないのである。というのは、かりにそのことに疑いを抱くとしても、その疑念は不満のもとにはならないからである。したがって、先述の仮定は万人の承認する仮定なのであり、それゆえ、社会的衝動に従うかぎり、人びとはその仮定に疑いを抱きはしないのである。

(3) 科学的方法の適用

すべての人が非常に多くの事物について科学的方法を使用しており、それを使用しないのは、その適用の仕方が分からない場合だけである。

(4) 科学的方法の成功

科学的方法を実地に試みたが、ついぞわれわれはその方法を疑うにはいたらなかった。むしろ逆に、科学的探究は意見を確定する点でこのうえなく驚異的な成功を収めてきた。

他の方法との対照的な相違点

科学的方法は、四つの方法のうちで、正しいやり方と間違ったやり方の差異を示す唯一の方法である。

科学的探究以外の意見確定の方法の長所についてよく考えてみるべきである。そのうえで、結局、自分は自分の意見を事実と一致させたがっていること、そして、それら三つの方法の帰結が事実と一致する理由は一つもないということをよく考えてみるべきである。意見と事実との一致という結果をもたらすのは、科学の方法が所有する特権である。こうした熟慮にもとづいて、どの方法を選ぶかを定めるべきである。この方法上の選択はどんな理知的意見の採択よりもはるかに重要である。それは人性における主要な決断の一つであり、ひとたび決定すれば、それを固く守らざるをえないからである。旧来の信念が確実な基盤をもたないことを知ることになってからも、ときには、習慣の力でその信念に固執する (hold on to) ように仕向けられることもある。しかし、そうした事態を反省すれば、こうした習慣は克服できるであろう。

6 おわりに

The person who confesses that there is such a thing as truth, which is distinguished from falsehood simply by this, that if acted on it should, on full consideration, carry us to the point we aim at and not astray, and then, though convinced of this, dares not know the truth and seeks to avoid it, is in a sorry state of mind indeed.

パースの英語は難解なことで有名です。ATLAS による機械翻訳の一例、朝輪氏による翻訳およびこの朝輪氏の英日翻訳の ATLAS による日英機械翻訳の一例を付録に添付しておきます

A ATLAS による英日機械翻訳

E : The person who confesses that there is such a thing as truth,

J : 真実のようなものがあるのを自供する人

E : which is distinguished from falsehood simply by this,

J : 虚偽から、これによって簡単に区別される.

E : that if acted on it should, on full consideration, carry us to the point we aim at and not astray,

J : that(その), act(活動する), it(それ), full(いっぱいだ), consideration(考慮する), carry(運ぶ), us(我々), point(ポイント), we(我々), aim(目的とする), astray(道に迷う)

E : and then, though convinced of this, dares not know the truth and seeks to avoid it, is in a sorry state of mind indeed.

J : そして、これが納得するが、真実をあえて知っていて、そして、それを避けるためにさがして、心の残念な状態に本当にある.

B 朝輪氏による英日翻訳

真理というものが存在することを認め、そして真理というものは、もしそれにもとづいて行動するならばわれわれを間違いなく目指すところに導いていくという点で、虚偽から区別されるということを認め、それを確信していながら、しかも真理を知ろうとせず、それを避けようとする人は、実際、あわれむべき精神状態にあるのである .

C 朝輪氏による英日翻訳の ATLAS による日英機械翻訳

J : 朝輪氏による英日翻訳

E : English-Japanese translation by 輪氏 in morning

J : 真理というものが存在することを認め、そして真理というものは、

E : The truth is admitted to exist And, it is true.

J : もしそれにもとづいて行動するならばわれわれを間違いなく目指すところに 導いていくという点で、

E : Original, we are correct and (*S): To the place in which (*S) aims in the point of leading if acting

J : 虚偽から区別されるということを認め、

E : It is an admission of the distinction from false.

J : それを確信していながら、

E : It is convinced.

J : しかも真理を知ろうとせず、

E : Moreover, it is not about to be learning as for the truth.

J : それを避けようとする人は、

E : Person who tries to avoid it

J : 実際、あわれむべき精神状態にあるのである .

E : Actually, it is in the mental status which should be pitied.